

## 私の心を照らした笑顔

徳島県 鳴門教育大学附属中学校 2年 木下 美優

ある日の午後、習い事からの帰り道のことです。母とけんかしたまま家を出てきた私は、もやもやした気持ちを抱えながら一人で歩いていました。すると、後ろの方でガタッと音がします。ふり返ると、おじいさんが道の段差につまずいていました。

「いけますか。」

少し近づいて声をかけると、おじいさんはゆっくり立ち上がって言いました。

「ああ、まあいけそうじゃ。ほれより、スーパーへの道がわからんのやけど、教えてくれるで。」

私はとっさに声をかけただけで、正直言ってあまり関わろうなんて思っていませんでした。だから一度は断ろうと口を開きかけました。でも困ったようなおじいさんの顔を見ていると、今まで私を助けてくれた人たちが思い出されます。

テーマパークで友だちとはぐれたとき、いっしょに待っていてくれたお姉さん。自転車で転んだときに心配してくれたお婆さん。バスの行き先を教えてくれたおじさん。見知らぬ私に親切にしてくださった笑顔がつぎつぎと心に浮かび、私の背中を押しました。

「はい、いっしょにご案内します。」

という言葉が自然と口をついて出ていました。

案内の途中でおじいさんは、自分の趣味のことなどいろいろな話をしてくれました。また、私が道を間違っても嫌な顔一つせず、

「ええよ、ええよ。ついていくわ。」

と笑ってくれました。このような言動の一つひとつに温かみを感じられ、心がほぐされました。そして無事スーパーにたどり着き、買い物も手伝うことになりました。おじいさんに頼まれたものを探し、買い物かごに入れていきます。そうしているうちに昔、今は亡きひいおばあちゃんと買い物に行ったことが懐かしく思い出され、胸が熱くなりました。

買い物を終わると、おじいさんは、

「お姉ちゃんのおかげでほんまに助かった。ありがとう。」

と、私ににっこりほほえみました。

おじいさんと別れたあとの帰り道。いつもは嫌な赤信号もゆつたりと待て、足どりも軽やかです。そして、いつもより明るめの「ただいま」の声とともに、玄関のドアを開けました。

私はおじいさんを助けたつもりだったけれど、実は励まされ助けられたのは私の方だったのかもしれない。最近、時間やしななければいけないことに追われ、道端で出会った人、少し話しただけの人になど、あまり関心を持たなくなっていました。でも、「袖振り合うも多生の縁」。余裕がないと感じるときこそ、身の周りに目を配り、困っている人の助けになるべきだと感じました。

見知らぬ人との出会い、人への親切は自分の心も明るく変えてくれます。私がおじいさんと会うことはもうないかもしれませんが、あの笑顔は今も私の心の灯台のように、正しい道を照らしています。